

ひょうご

—神と伝—

伝説紀行

## 妙見の臼

### 不思議な少年の正体

伝説

妙見の臼  
不思議な少年の正体

紀行

妙見菩薩の坐す山と古代の養父

- ・縁に導かれて
- ・妙見の臼と夏祭り
- ・名草神社の朱塗りの塔
- ・飛鳥の夢・但馬の古代
- ・網場から妙見山を望む

関連情報

用語解説  
参考書籍  
所在地リスト

## 妙見の臼

### 不思議な少年の正体

はるかに遠い昔。八鹿（ようか）の妙見山（みょうけんさん）に、妙見菩薩（みょうけんぼさつ）がお下りになったころのことです。

網場村（なんばむら）に森木三右衛門（もりきさんえもん）という人が住んでいました。三右衛門は妻と二人暮らしでしたが、信心のあつい働き者でした。

ある夜のことで、三右衛門が仕事を終えてねようとしていたところ、とんとんと戸をたたく音が聞こえました。

「こんな夜ふけにだれだろうか」

三右衛門がふしぎに思いながら戸を開けてみると、暗やみの中に一人の少年が立っています。

「夜おそく申しわけありませんが、一晩、とめてもらえないでしょうか」

少年のつかれきったようすを見て、気の毒に思った三右衛門は、家に招き入れました。

「何のおもてなしもできんが、休んでいきなされ」

家の明かりであらためて少年を見ると、どうもただの人とは思えません。顔だちはまだ少年ですが、何とも神々しい気配がします。

少年を部屋へ案内した後も、三右衛門はどうも落ち着きませんでした。何か大切なことを忘れていたような気がしてならないのです。そのうちどうしたわけか、蔵の中にしまっている木の臼（うす）のことが気にかかりはじめました。



そこで、三右衛門は妻と相談して、臼を少年の部屋まで運びこみました。すると少年は、当たり前のようにその臼に座ってこう言ったのです。

「私はこれから休ませてもらいます。けれど、私が休んでいる間、けっして部屋の中をのぞかないでください」

そう言われると、三右衛門は、ますます気になってしかたがありません。布団に入っても、なかなかねつかれないまま考えこんでいましたが、夜中をすぎるころ、とうとうがまんできなくなってしまいました。ねどこをそっとぬけ出すと、少年の部屋に近づいて、戸のすきまから中をのぞいてしまったのです。するとそこには、臼にぐるぐると巻きついてねむっている、一ぴきの大きな白い蛇（へび）の姿がありました。

あまりのことに、三右衛門は気を失うほどおどろきました。ふるえながら自分の布団にもどり、そのまま朝までねむることもできませんでした。



ようやく東の空が白みかけたころ、少年は起きてきて、三右衛門に声をかけました。

「とめていただきありがとうございます。私はこれから帰ることにいたします」

支度をととのえて、少年は出て行きました。しかしきみょうなことに、街道ではなく、道のない山の方へと向かってゆきます。神社の森がある山へ向かってまっすぐに進み、やがて、尾根（おね）をこえるところで、その姿が夜明け前の空にくっきりとうかんで見えたのでした。三右衛門はようやく気づきました。

「そうか、妙見さまのお使いだったのだ」

そこで三右衛門は、少年の姿が最後に見えた尾根の上に鳥居を建てて、妙見様をおがむ場所にしました。それから、三右衛門の家は栄えて、お金持ちになったといえます。これを聞いた村人たちは、鳥居がある場所を、富貴が擽（ふきがたわ）と呼ぶようになりました。



しかし、言いつけに背いて部屋をのぞいたためか、その後、この家のあととりに生まれた人は、みんな生まれつき右の目が見えなかったということです。

三右衛門から何代か後、信心のない人がこの家の主になりました。妙見様を信心せず、鳥居が古くなってたおれても、知らん顔をしていたところ、だんだんと貧しくなって、とうとう家は絶えてしまったのです。

けれどもあの臼だけは、分家の三吉（さんきち）があずかっていた。

文化4（1807）年の秋、網場村に大火事がおきました。村中の家が焼けてしまいましたが、臼をしまってあった三吉の蔵だけは焼けませんでした。

「きっと、妙見様が臼を守っておられるのだらう」

そう考えた三吉は、この臼を日光院（にっこういん）へ納めて、供養してもらうようにとたのみました。

こうして、いまでもこのふしぎな臼は、日光院にお祭りされています。

## 紀行「妙見菩薩の坐す山と古代の養父」

### 緑に導かれて

「妙見の臼」 このお話を読んで、とても印象が深かったのを覚えている。妙見様と蛇という組み合わせ、そして今でも伝説の「臼」が伝わっているということが、面白く感じられたのだ。

妙見山そのものにも、強く引きつけられた。何度か、林道を通って蘇武岳（そぶだけ）や三川山（みかわやま）から妙見山までの尾根を歩いたことがあって、美しいブナ林の芽生えや、夏の日の深い森の静けさの鮮烈な印象が残っていたからである。

その後、妙見様を祭っている日光院へ連絡させていただいたところ、森田副住職から「今年は、ちょうど『妙見の臼』の本を作ろうとしていたところです」とうかがって、もう一度驚くことになった。縁とはこういうことを言うのだろうかと思いながら、伝説紀行の旅は始まったのである。

### 妙見の臼と夏祭り



日光院（石碑）

妙見菩薩を祭る日光院は、養父市八鹿町（やぶしようかちょう）の石原にある。背後の妙見山から、東に延びる尾根の中腹に位置していて、ふもとには円山川支流の八木川が流れる。旧八鹿町の中心部から西へ、県道267号日影養父線の緩やかな長い坂を登り、妙見蘇武林道を通って石原の集落を過ぎると、少し急な上り坂となる。そのまま、いくつか大きなカーブを過ぎると、巨樹がそびえる日光院の、白い塀が見える。



日光院（門）



護摩堂



妙見の臼と由緒書



由緒書



日光院（境内）



日光院（看板）



臼の底

境内に足を踏み入れてまず感じたのは、巨樹の香りと、霊気とでも言えるような不思議な印象だった。こけむした地面をはうように根が伸びる。天を指すケヤキはすばらしい母樹で、育苗のための採種もおこなわれているそうだ。数百年の巨樹の種子が、人の手を経て、また子孫を残してゆく。考えてみると、これも未来へ向けての伝説と言えるかもしれない。



妙見の臼

日光院の森田副住職のお話では、「妙見の臼」は江戸時代に日光院に奉納されたとのことである。副住職の特別のご配慮をいただいて、宝物の臼と、その由来を記した古文書を拝見することができた。

最初に物語を読んだときは、どっしりとした石臼を思い描いていたのだが、実際は木製の臼で、想像していたよりも深く背が高いものであった。虫食い穴がたくさん開いていて、作られてからの年月を思わせる。普通の餅つきに使うような横杵（よこぎね）には、この臼は深すぎるので、おそらく縦杵（たてぎね）が使われたのだろう。

妙見様のお使いであった蛇が、この臼にどんなふうにかき付いていたのか、森田副住職のお話では、「臼の中に入って、とぐるを巻いていた」とも言われているそうだ。

由来の内容は、伝説に語られたとおりである。地元の村の大火でもこの臼は焼け残ったということだから、何か不思議な幸運に恵まれていたのだろう。



妙見菩薩のお使い？



妙見星祭

日光院では、毎年7月18日に夏まつりが開かれている。境内に並べられた、1000を超える紙コップ。その中に点されたろうそくの光が、小さな灯籠（とうろう）のようにゆらめく、ささやかな万灯会である。村の人たちが総出で、日暮れ前から準備をする。それぞれに願い事が書かれた紙コップに火が入るのは、夏の空が藍色になるころである。子供たちは境内で、甘いものをほおぼりながら昔話の紙芝居を見る。

去年（2007年）の夏まつりの時には雲が多かったが、晴れていれば、漆黒の空に銀の粉をまいたような星空がながめられたに違いない。

祭りの中でも大切なのが、護摩堂で午後7時半ごろからおこなわれる護摩焚（ごまだき）である。読経の中、数百の護摩木が焚かれる。参拝した人は皆、護摩堂の床に座って合掌しながら、僧侶の読経に唱和する。まだ若い女性が、ごく自然に般若心経を唱和している姿には、驚きとともに、このお祭りが村の人たちにとって本当に身近な、暮らしの一部になっていることを感じた。



妙見星祭

## 名草神社の漆塗りの塔



名草神社（鳥居）



名草神社（境内）



名草神社（本殿）

日光院から5キロメートルほど山を登った所には、名草神社（なぐさじんじゃ）がある。元はこの場所が日光院の位置だったが、神仏分離によって現在の姿になったという。今も残る名草神社の三重塔は、出雲大社の境内に出雲国の守護大名である尼子経久（あまこつねひさ）が願主となって大永7（1527）年に建立したものだ。出雲大社本殿の用材として妙見杉を提供した縁によって、譲り受けたものである。寛文5（1665）年、塔は解体され、日本海を船で運ばれて現在の場所で再建されたのである。昭和62（1987）年に解体修理がおこなわれ、現在では丹塗りの鮮やかな姿となっている。屋根の四隅には、「見ざる、聞かざる、言わざる、思わざる」が陣取っているけれど、忙しい現代、僕たちはなかなかその境地には至らないのである。

名草神社は本殿・拝殿ともに県指定文化財である。急な階段を登りつめると、静穏な明るい境内に、落ち着いた古色をおびた社殿が建っている。



三重塔



名草神社（看板）

## 飛鳥の夢・但馬の古代

妙見山のふもとには、古代にさかのぼる文化遺産がいくつもある。南の山すそ、尾根に抱かれたような谷筋のひとつに、箕谷古墳群（みいだにこぶんぐん）がある。1983年の発掘調査で、2号墳の石室から、銅象嵌（どうぞうがん）の銘文がある鉄刀が出土して一躍有名になった。



箕谷古墳群（石碑）



箕谷古墳群（全景）



2号墳正面



石室内部

象嵌は、細いタガネなどで表面に文字を刻み、そこに金銀や銅などの針金を埋め込んだ後に研ぎ出すという手法である。その後の研究で「戊辰年」は、西暦608年の可能性が高いとされ、古墳や出土した土器の年代を決める上で、たいへん重要な手がかりとなった。

608年は、推古天皇16年にあたる。飛鳥に宮を営んだ女帝の下には、厩戸皇子（うまやどのみこ）、蘇我馬子（そがのうまこ）があり、さらには遣隋使、法隆寺の造営など、飛鳥文化が花開いたころである。しかし一方では、その後の「大化の改新」に見られるような、激しい政治的暗闘の時代でもあった。箕谷2号墳に葬られた人物は、そんな時代を生きていたのだ。

刀は、この地の長へ、飛鳥の朝廷から下賜されたものだったのだろうか。鮮やかな五色に彩られた法隆寺の完成、厩戸皇子の死、蘇我氏の興隆と滅亡、中大兄皇子の活躍。古墳の主は、そういった出来事を見たのだろうか。その時代の但馬には、どのような歴史が展開していたのだろうか。想像は尽きない。



戊辰年五月□

箕谷2号墳出土  
銘文入鉄刀  
（重要文化財）  
国（文化庁）保管

## 網場から妙見山を望む

箕谷古墳群から北東へ2.5km。八木川が円山川に合流するあたりが、網場（なんば）である。「妙見の白」の主人公、森木三右衛門の屋敷があったのが、この網場村だったということである。ここから妙見山の方をながめると、川の西側になだらかな尾根が延びている。その少しへこんだように見える所が「富貴ヶ撓（ふきがたわ）」であろうか。



網場付近の円山川



富貴ヶ撓



富貴ヶ撓から妙見山を望む

ゆったりと流れる円山川から、何千年も変わらない妙見山をながめる。僕たちの時代は、どんな伝説を、未来の人たちの心に伝えられるだろうか。

## 用語解説

### 妙見山（みょうけんさん）

兵庫県下では各地にこの名を冠した山があるが、ここでは養父市に所在する山。標高は1,139m。氷ノ山後山那岐山国定公園（ひょうのせんうしろやまなぎさんこくていこうえん）に属し、ブナの原生林をはじめ植生がよく保存され、動物も豊富である。

### 日光院（にっこういん）

養父市八鹿町石原に所在する真言宗の寺院。妙見山（みょうけんさん）と号する。本尊は弘法大師作と伝えられる妙見大菩薩。日本三妙見に数えられる。寺伝によれば、敏達天皇（びだつてんのう：6世紀）の時、日光慶重（にっこうけいちょう）が草庵を開いたのがはじまりという。永禄・天正年間（16世紀）には最盛期を迎え、妙見信仰の一大霊場となった。現在名草神社に残る三重塔（重要文化財）は、この時期に出雲大社より日光院へ寄贈されたものである。しかしその後、羽柴秀吉による山陰攻略の兵火で堂宇の多くを焼失したという。江戸時代には復興したが、明治5（1872）年の神仏分離令により、現名草神社と分離した。妙見信仰を示す史料は「日光院文書」として県指定文化財。

### 妙見菩薩（みょうけんぼさつ）

仏教における信仰対象である天部（てんぶ：仏法を守護する天界の善神の総称）の一つ。妙見菩薩は他の菩薩と異なり、インドが発祥ではなく中国で成立した。中国では北斗七星を信仰する思想があり、これが仏教思想と融合して神格化されたものが妙見菩薩だという。「妙見」は、見る力に優れた者の意味であり、真理や善悪を見る力に優れた仏であることを示す。国土を守り幸福をもたらすとされ、日本では、奈良時代から信仰の対象となってきた。全国に散らばる「妙見山」は、妙見菩薩信仰が広くおこなわれていたことを示すものである。

### 名草神社（なぐさじんじゃ）

養父市石原に所在する式内社（しきないしゃ）。妙見山山腹の、標高800m付近に位置する。祭神は名草彦命（なぐさひこのみこと）ほか6神だが、北辰（北極星）とされる天御中主神（あめのみなかぬしのかみ）を含むことから、同地の帝釈寺と一体化して、平安時代末より妙見信仰の場となっていたという。明治5（1872）年の神仏分離令により、現日光院と分離した。日光東照宮を模した本殿、厳島神社を模した拝殿は県指定文化財。また、16世紀に出雲大社より寄贈された三重塔は国の重要文化財。

### 神仏分離（しんぶつぶんり）

明治時代初め、政府が天皇の神権的権威確立のためにとった宗教政策。従来習合していた神道と仏教を分離することを旨とする。この政策が廃仏毀釈（はいぶつきしゃく）の運動となって、全国で仏教に対する破壊的活動が起こり、廃寺となる寺院が続出した。

### 出雲大社（いずもたいしゃ）

島根県出雲市大社町に所在する式内社（しきないしゃ）。出雲国一宮。祭神は大国主神（おおくにぬしのかみ）。記紀神話では、大国主神が天津神に出雲国を譲るよう言われた時に、「国譲りの代償として、この地に立派な御殿を建ててほしい」と求めて建てられたのが、出雲大社の始まりであるという。縁結びの神様としても知られ、神在月（かみありづき：一般的には神無月（かなづき）と呼ぶが出雲国のみは神在月と称する。10月のこと）に、全国から八百万の神々が集まり神議がおこなわれるという話はあまりにも有名である。

## 用語解説

出雲国（いずものくに）

律令下の国の一つ。現在の島根県東半部にあたる。国府・国分寺は、現在の松江市に置かれた。

守護大名（しゅごだいみょう）

南北朝期～室町時代に、將軍足利氏によってその国の支配を委任された守護。主に足利氏の一門や有力家臣が任命された。守護は幕府から与えられた権限を利用して、国人（こくじん：領地を所有する在地の武士）層を家臣として組織化し、この結果、守護と国人層による領国制度が成立していったとされている。

尼子経久（あまこつねひさ）

戦国大名（1458～1541）。出雲国守護代であった尼子清定の子。はじめ守護代となったが、1484年、室町幕府に追われて流浪した。その後勢力を回復して、因幡（いなば：現在の鳥取県東部）以西の山陰地域を攻略し、山陽道にも進出した。このため周防（すおう：現在の山口県東部）の大内氏と対立したが、自身の配下であった毛利元就（もうりもととなり）が大内氏と結んだため、以後は大内・毛利の両氏と交戦した。

箕谷古墳群（みいだにこふんぐん）

養父市八鹿町小山に所在する、古墳時代後期の5基の円墳からなる古墳群。円山川支流である八木川の、左岸に派生する尾根に挟まれた谷に立地する。1983～84年に体育施設建設に伴う発掘調査がおこなわれ、2号墳から「戊辰（ぼしん）年五月」の銅象嵌（どうぞうがん）銘文がある大刀が出土して注目を集めた。「戊辰年」は、西暦608年とされており、同古墳で出土した須恵器（すえき）とともに、古墳の年代を研究する上での基準資料となっている。箕谷古墳群は国史跡、大刀は重要文化財に指定されている。

推古天皇（すいこてんのう）

第33代の天皇（554～628）で、史上初の女性天皇。母は蘇我氏の出身。敏達天皇（びだつてんのう）の皇后であったが、その没後に立った用明天皇（ようめいてんのう）がわずか2年で病死、さらに崇峻天皇（すしゅんてんのう）が在位5年で死亡（蘇我馬子による暗殺説がある）すると、蘇我氏に推されて即位した。厩戸皇子（うまやどのおうじ：聖徳太子）を摂政とし、大臣蘇我馬子との均衡を図りつつ政治を運営した。その治世には冠位十二階や十七条憲法の制定、遣隋使（けんずいし）の派遣、法隆寺の建立、国史の編纂など、政治制度の整備や文化の振興などがおこなわれた。

厩戸皇子（うまやどのおうじ）

用命天皇の皇子（574～622）。聖徳太子は諡名（おくりな：死後に贈られる名）。おばに当たる推古天皇の摂政として、政権の整備をおこなった。冠位十二階と十七条憲法の制定（ただし十七条憲法については、『日本書紀』編纂時の創作とする説もある）、遣隋使（けんずいし）派遣などの業績は著名である。大陸文化の導入、仏教興隆に尽力し、四天王寺、法隆寺などを建立した。

蘇我馬子（そがのうまこ）

飛鳥時代の中央豪族（？～626）。地位は大臣（おおおみ）。大連（おおむらじ）であった物部守屋を滅ぼし、天皇との姻戚関係を利用して勢威をふるった。仏教を受容し、法興寺（ほうこうじ：馬子が建立した日本最古の伽藍。飛鳥寺）を建立した。子は蘇我入鹿。



## 用語解説

### 法隆寺（ほうりゅうじ）

奈良県生駒郡斑鳩町に所在する聖徳宗の寺院。聖徳太子が建立した寺院のひとつで、創建年代は7世紀の前半とされる。創建時の伽藍は670年に焼失したことが『日本書紀』に記録されており、金堂、五重塔などがある現在の西院伽藍は、その後に再建されたものと考えられている。西院伽藍は、木造建築としては世界最古のもので、建築のうち西院伽藍と東院伽藍の夢殿が国宝に指定されているほか、仏像、工芸品などに多数の国宝がある。1993年に「法隆寺地域の仏教建造物」としてユネスコの世界文化遺産に登録。

### 中大兄皇子（なかのおおえのおうじ）

飛鳥時代、舒明天皇（じょめいてんのう）の皇子（626～71）。後の天智天皇（てんじてんのう）。中臣鎌足とともに蘇我氏を滅ぼし、孝徳・斉明の両天皇の皇太子として、大化改新後の政治を主導した。外交では百済を支援したが、白村江（はくすきのえ）の戦いで唐と新羅の連合軍に大敗した。668年に滋賀県の大津京で即位。

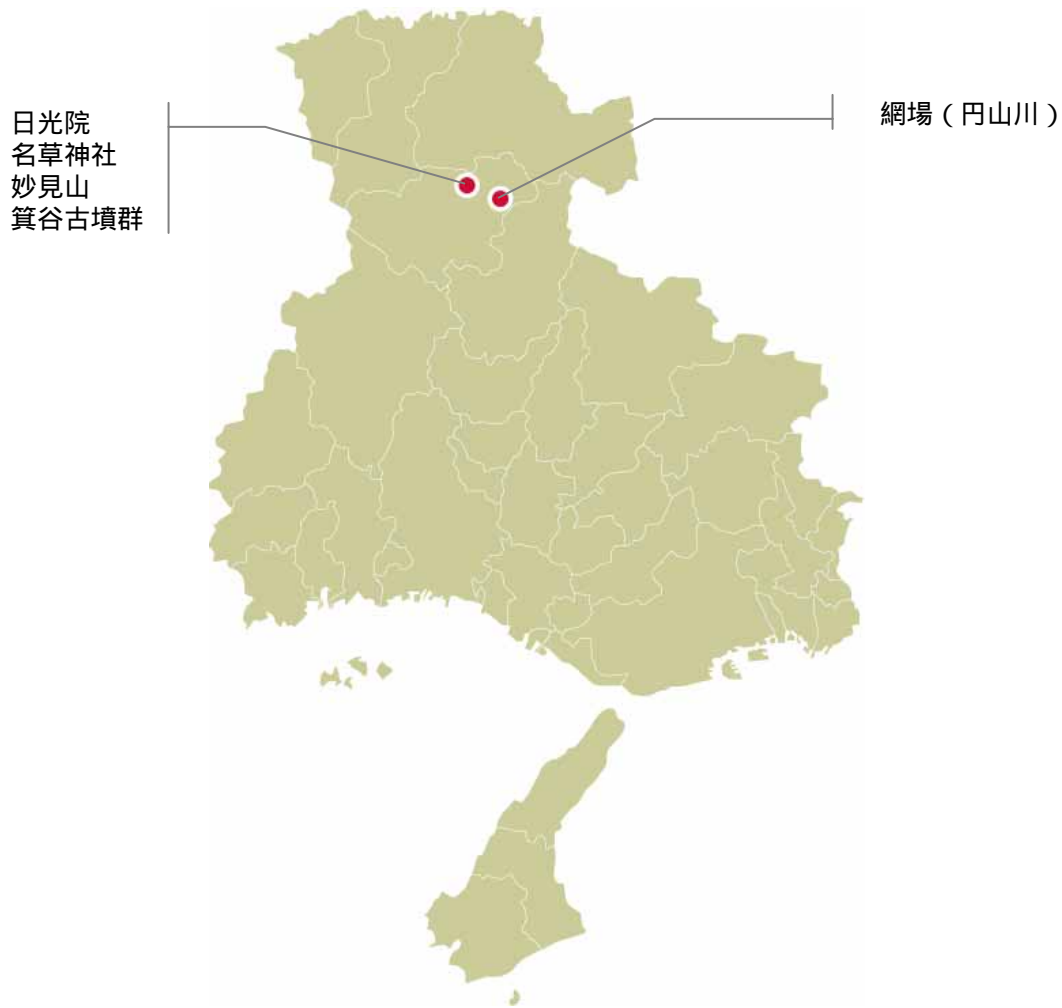
### 円山川（まるやまがわ）

兵庫県北部を流れて日本海に注ぐ但馬最大の河川。朝来市円山から豊岡市津居山（ついやま）に及び延長は67.3km、流域面積は1,327平方キロメートル。流域には平野が発達し、農業生産の基盤となっている。河川傾斜が緩やかで水量も多いため、水上交通に利用され、鉄道が普及するまでは重要な交通路となっていた。

## 参考書籍

	書籍名	刊行年	著者名	発行者
伝説	郷土の民話但馬篇	1972	郷土の民話但馬地区編集委員会	兵庫県学校厚生会
歴史・文化	兵庫県むかしむかし第二集	1974	兵庫県老人会連合会	兵庫県老人会連合会
	日本古典文学大系65 日本書紀 下(推古天皇の条)	1975	坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注	岩波書店
	兵庫のふるさと散歩4 但馬編	1978	兵庫のふるさと散歩編集委員会	21世紀兵庫創造協会
	兵庫県大百科事典(上・下)	1983	神戸新聞出版センター	神戸新聞出版センター
	兵庫県八鹿町ふるさとシリーズ第4集 八鹿の文化財	1991	八鹿町教育委員会編	八鹿町教育委員会
	兵庫県史考古資料編	1992	兵庫県史編集専門委員会	兵庫県

## 所在地リスト



網場(円山川)	養父市八鹿町下網場
日光院	養父市八鹿町石原450
名草神社	養父市八鹿町石原1755-6
妙見山	美方郡香美町村岡区作山・養父市八鹿町尾崎
箕谷古墳群	養父市八鹿町小山・西家ノ上

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行 神と仏  
<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館  
〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 079-288-9011

第1刷 2008年4月1日